誕生日記念

坂上智代は俺の妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誕生日記念

【Nコード】

N17590

【作者名】

坂上智代は俺の妻

【あらすじ】

今日は俺の妻の誕生日。

なので記念SSを描きました。

(前書き)

智代たん。

(´、`*) ハアハア トリップ中

【誕生日記念SS】

恐怖

今、私は幸せの絶頂に居る。変態だけど優しい夫。目の中に入れても痛くないと思うほど可愛い娘。

形あるモノには必ず終わりがある。それが世界の理だ。残念だが、私とぐつちの関係も何時かは終わりが訪れてしまう……。

若い頃は「ずっと続く愛もある」と永遠の愛を信じる事が出来た。でも、今は……。

ぐつちは変わってしまった。以前はもっと私を愛してくれたのに……。以前はもっとデートしてくれたのに……。夜の時間だって……。って、私は何を恥ずかしいことを言ってるんだあああ！！！！

これではぐつちみたいじゃないか……私はこんな変態じゃないのに。全部ぐつちのせいだ。うん、全てぐつちが悪い。

……。

老いが原因だろうか？ ぐつちはどうしようもないロリコンな変態だからな。

一応念のために言っておくが、どうしようもないロリコンに対してでなくぐつちに対してだから誤解しないでくれ。

今日の私はかなりブルーだ。鬱状態と言っても過言ではないだろう。

何故ならば……。

太陽が落ち、町が闇に染まる。

ピンポンとインターホンが鳴る。

「こんな時間に誰だろうか？」

疑問を胸に抱えながら、ドアを開けると……。

「智代、誕生日おめでとう」

「智代、誕生日おめでとう！」

「智代さん、お誕生日おめでとうございませう」

「智代ちゃん、誕生日おめでとう！」

そう言つて、私に花束を渡す。

「ありがとう」

私は花束を受けとり、居間に案内した。

10月14日。今日は私の誕生日だ。音夢、杏、渚、音姫が私の誕生日を祝福してくれる。

杏と渚は学生時代からの私の親友。音夢はぐつちの義妹。音姫はぐつちの義姉。

他にもメールや電話で沢山の人がお祝いしてくれた。それでも私の気分は最悪だった。

一番祝つて欲しい最愛の人間がそこに居ないからだ。

「あれ、ぐつちは？」

杏が周囲を見渡しながら質問する。

「……残業だそうだ」

仕事だから仕方ないのだが……。

「義兄さん、相変わらず空気読めなさすぎ……。駄目な義兄さんでごめんなさい」

「弟くんも、こんな日に残業しなくても良いのにね」

同感だ。だが、それを口に出すことは出来ない。ぐつちが頑張つてるのは私のためなのだから……。

「……仕事だから仕方ない」

残念な気持ちに変わりないが。

「苦労させられてるのね。……可哀想な智代」

うん、色々……。それでも、ぐつちの側に居たいんだから仕方ない。

「……自分で選択した道だからな。愛する人と一緒ならどんな苦難だって乗り越えられる」

「うんうん、私も義之君と一緒にだから頑張れるんだよ」

「はい、朋也君と一緒にだとしてもどんなことでも出来る気がします」

「少しだけ頬をりんごみたいに赤く染める、音姫と渚」

「……どうせ、あたしは独り者よ」

「……杏さん、今夜は一緒に呑みましょう!」

音夢は、杏に酒を酌する。

「……もう、こつなつたら倒れるまで呑んでやるわよ」

杏は酒を一気呑みした。

「私もお供します」

杏に続いて音夢も一気呑みをする。

そんなに呑んだら明日の仕事に響くんじゃないか？

そう思い、注意しようと思ったが……。

「杏ちゃんと音夢さん、そんなに呑んだら明日の仕事に響きますよ?」

渚が杏達を諭す。流石、渚だ。

これで落ち着くかと思っただが……。

「るっさいわね、渚! 女には呑まなきゃやってられない日があるのよ!! 既婚者にはわからないでしょうけど……」

もう、酔っぱらったのか!? 一気呑みなんかするから……。

「そうれす。渚さん達みたいに幸せな既婚者に私達の気持ちらんか理解出来ないんれす」

音夢は酒の影響なのか、突然泣き出す。

「……」

私達は何とも言えない目でふたりを見る。

「……あんら達も呑みなさいよ!!」

「そうれす。空気読めないんれすか!?!」

突然、ふたりが私達を襲う。私は何とか防ぐことが出来たが……。
渚と音姫は……。

30分後。

「既婚者には既婚者の辛さがあるんれす」

「渚しゃんの言う通り!!!」

「朋也君は誰にれも優しいからモテるんれす。だから浮気されないか心配れす」

岡崎は優しいからな。その上イケメンだ。モテない理由がない。

「同感!!! 男なんて……」

何故か愚痴り始める、ふたり。

「智代、おつまみまだーらの？」

暴君と化した、杏。

「……」

暴れ疲れたのか畳の上で寝る、音夢。

ただ地獄絵だけがそこにあつた。

「これはもうどうしようもないな。……時が過ぎるの待つとしよう」
暴れられて家が滅茶苦茶にされたら困るからな。

数時間後。

「……やっと、治まったか……」

暴れ疲れて屍のように寝むる酔っぱらい達。

ふと時計を見る。

「今日が終わるまで後……」

最愛の人と一緒に誕生日を過ごしたかった。ただ、それだけ……。

これは我が儘なのだろうか？ 悲しくて今にも泣いてしまいそうだ。

「誕生日おめでとう、智代。何とか間に合ったかな？ 遅くなつて、

ゴメン」

声がした方向にふり返る。そこに最愛の人が居た。

「……っ」

今まで我慢してた何かが崩壊した。私はぐっつちの胸に飛び付いた。
ぐっつちは私を優しく迎えてくれる。

「ばか、ばか、ばか、ばか」

私はぐっつちの胸を玩具が欲しくて駄々をこねる子供みたいに叩く。

「愛しているよ」

ぐつちが私に小さな箱を渡す。

「？」

「明けてみなよ」

明けてみると、高そうな指輪が入っていた。安くみても十万円くらいはするだろう。

「ぐつち……」

「給料だけじゃ足りないからさ。バイトしてたんだよ。本当は今日も残業じゃなくてバイトしてたんだ。寂しい思いさせてゴメン」

……これが理由だったのか、なのに私は。

「……ばかあ」

ふたり、キスをする。

今の私はとても幸せな気分だった。先程までの憂鬱な気持ちが嘘みたいだ。

別に指輪のプレゼントが嬉しい訳ではない。私のために頑張ってくれた、その気持ちが嬉しいんだ。だから、私は……。

「うん、私も愛しているぞ」

この愛しい気持ちをぐつちにぶつける。

「智代……」

「ぐつち……」

もう、言葉は要らない。ふたり、体を重ねる。

……。

ふと背後に視線を感じる。ふり返るとそこに……。

「邪魔者は退散するね」

「どうぞ、ごゆっくり」

「はあー、……あたしも彼氏欲しいわ。どっかに良い男居ないかしら……」

「もう、今夜はとことん呑みましょう！」

そう言って退散する、覗き魔達。杏と音夢は無事帰れるのだろうか？ 少し心配だ。

「……見られたのか……」

私は床に膝をついて落ち込む。

ぐっちが私の肩を叩く。

「俺は気にしないから大丈夫」

親指を立て笑顔で微笑む。

「私は気にするんだああああ！！！！」

ハリセンの音が深夜の町に木霊した。

END

(後書き)

私の妻の誕生祝いありがとうございましたw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1759o/>

誕生日記念

2010年10月14日00時10分発行